

歴史学の社会的役割をめぐる

清水正義

はじめに

- 一 歴史学の役割 悲観と楽観
- 二 敗戦と歴史学の課題
- 三 「社会史」の登場と教科書問題
- 四 歴史学は現実の課題に役立たないか
おわりに

はじめに

どの学問分野にも「〇〇概論」という書物ないし大学講義題目はある。法学概論、経済学概論、文学概論などである。歴史学の場合それは史学概論というのが普通である。ところが、その「史学概論」を銘打つ書物が最近、めっきり少なくなっている。とくに単著による「史学概論」は少なくなった。書けなくなったと言うべきかも知れない。

林健太郎『史学概論』（一九五三年）、和歌森太郎編『史学』（一九五五年）、上原専録『歴史学序説』（一九五八年）、

太田秀通『史学概論』(一九六五年)といった、戦後歴史学の中で産み落とされた、よかれあしかれ時代を表現する定評ある概論書が歴史学の入門書として大学教養課程のテキストで使われなくなってもう数十年は経つ。

この背景にはもちろん歴史学(のみならず学問一般)を覆う現代的状況がある。歴史学の発展と細分化に伴い、一人の人間が歴史学全般について目配りを効かせることが不可能になったという状況がまずある。そしてまた、戦後歴史学を特徴づけた歴史の発展段階理論ないし進歩史観が顧みられなくなり、グラント・セオリーなき歴史学の時代となったことも大きい。歴史を見る視点なり歴史像なりがクリアーでなくなった。あるいはまた、すべてを説明する統一的セオリーがなくなった、というよりも、そういうセオリーがあり得るとする希望的想定そのものがなくなってしまった。

二〇世紀末の社会主義体制の敗北が戦後歴史学のひとつの土台をなしていた「史的唯物論」的歴史観の論拠を一举に崩したことも「史学概論」を書きにくくしている一因であろう。

小稿では、戦後に著されたいくつかの「史学概論」風書物を取りあげ、その中で、歴史学の社会的役割ないし社会的有用性についてどのような議論がなされているかを鳥瞰する。いずれの学問分野もその社会的役割ないし社会的有用性が存在することは当然であるが、歴史学の場合は「過去を明らかにする」という学問の性格から「現在の」社会的諸問題にどのような寄与ができるかという問題が、意識するにせよ無意識にせよ、研究者には突きつけられる。そして、それに対する答えの出し方が、たんに個々の論者の思想傾向なり主張なりを越えて、歴史学をとりまく時代状況や歴史学自体の内的論理によって左右されてくる。それ故、各時代の論者の歴史学の有用性をめぐる議論を振り返ることで、逆に、その時代のあり方や歴史学の学問的状況について理解する一助とすることができると考えられるのである。

一 歴史学の役割 悲観と楽観

ドイツ近代史を専攻する下田淳氏が最近になって著わした『歴史学「外」論』は、「史学概論」が書けなくなった今日の歴史学界の中で、にもかかわらず敢えて書くならばこういう流儀もあるという歴史エッセイである。その中で氏は、歴史学の役割という問題について次のように述べている。

私は、現在の諸問題を解決するために歴史を研究するという立場は、研究対象や問題の立て方を狭くすると思っている。むしろ逆に、歴史研究が、結果的に「何か」あるいは「誰か」の問題解決に役立ったというくらいの方がよいのではないか。歴史学は、たとえば医学のようにまず解決すべき問題（病気）があつて、それに対処していくといった種類の学問ではない。もちろん問題解決のための歴史研究という立場を否定するものではない。それだけに歴史学の目的を限定するのはどうかと言っているのである。それでは「何のための」「誰のための」歴史研究なのか？ 私は結局「自分自身のため」としか答えられない。悪く言えば趣味という言葉で片づけられそうである。しかし、歴史家個人がそのテーマを選択したのには、彼（彼女）なりの問題意識（切実なものであれ趣味的関心であれ）があるはずである。この「個の」問題意識が同時代に生きる「他人」「集団」「社会」、最終的には「人類」にも共有されるならば、歴史家の仕事はまさに現代にとつての治療的役割を果たす可能性を秘めているのであろう。しかしそれはあくまで「可能性」であり、はじめから「現代社会の諸問題を解決するための歴史学」と大上段に構えるのは私の趣味に合わない。¹

下田氏は、歴史家個人の関心（悪く言えば趣味）で行っている歴史研究の結果、それが社会の何かの役に立っているかも知れないが、それはあくまで結果であって、歴史家がそれを目的にして歴史研究をしているわけではない、と言うのである。この文章は、もちろん下田氏の個人的気持ちを述べているのであって、他の歴史家には他の言い回しがあるかも知れないが、私の目からは、今日、とくに若い世代の歴史家たちのいわば最大公約数的な思いを文字化してしまった、その意味でかなり共感を得られる言い回しであるように感じられた。

こうした文章を、例えば次のような文章と読み比べてみよう。

われわれが、われわれの住む社会全体とわれわれ自身の生活とを未来に向かってより良く前進させる目的のために、過去を反省し、過去を見直していくのである。……過去の歴史上の事実をただあつたがままに書くなどということは原理的に不可能であつて、われわれは歴史をばより良き明日の社会と生活とを創り出すために編み直し、そしてそれを記述し直すのである。^③

この文章が書かれたのは一九五五年、今から半世紀前である。和歌森太郎氏を中心とする日本史、民俗学の系統の研究者たちによる「史学概論」の一部であつて（この部分の執筆は宮島肇氏）、戦後歴史学の「本流」たる歴史学研究会周辺の問題意識旺盛の歴史家たちの書ではなく、もとよりマルクス主義の立場に立ったものでもなく、どちらかといえば穏健保守派の立場からの「史学概論」と言つてよい。「われわれの住む社会全体とわれわれ自身の生活とを未来に向かってより良く前進させる目的のために」と、歴史学の役割について能天気なほど樂觀的な言い回しが特徴的である。

この一見してきわめて「健全な」未来志向の歴史論は、しかしどこことなく投げやりで、通り一遍の議論にも聞こえる。上の叙述では、歴史学の有用性について声を大にして語っているようにも聞こえるが、ほとんど何も言っていないようにも聞こえる。むしろ、ここで確認しておかなければならないのは「より良き明日の社会と生活を創り出すため」といった、やや無内容な叙述のトーンに見られる、歴史学の社会的役割についての無限定の信頼である。

もうひとつ紹介しよう。

歴史の研究とは歴史的事実の発見であり探求であり、知られた歴史の間断なき獲得である。歴史家の第一の課題はこのような知られた歴史を人々に提供することであり、それ故歴史家は知られた歴史を無限に拡大させ豊富ならしめるために働くのである。この意味においては歴史学の発達は最も素朴な意味において人間の認識の進歩、知識量的な拡大の過程であるということが出来るであろう。³

この文章も一九五三年、やはり半世紀前に書かれた、西洋近代史家林健太郎氏の「史学概論」の一部である。今日までに書かれたいくつかの「史学概論」の中でおそらくもつとも首尾一貫した、過不足のない歴史論を展開した林氏のこの著書の中で、歴史学の社会的役割について字面だけでもとりあげた部分がこの文章である。歴史学の持つ無限の可能性を信じ、その歴史家の能力を人間社会の認識進歩のために駆使するという言い回しは、和歌森氏たちの著書と同様の歴史学に対する樂觀性を示しているのだが、それにしても歴史学の役割についてこの部分以外にはほとんど触れられていないのは、この問題について林氏が関心を持っていなかったからなのであろうか。私は必ずしもそうは思わない。む

しろ、戦後少し経ったこの時点で、歴史学の社会的役割なり有用性なりについて、著者は当然のこととして言わずもがなの立場を取っていたのではないか。和歌森氏たちの著書にせよ、林氏の著書にせよ「(歴)史学(概論)」を銘打った著書の中であまり語らない歴史学の役割について、語るとなるといきなり無批判の歴史学礼賛に近い文章になるのは、その点を例証するのではないだろうか。

最初にとりあげた下田淳氏の、歴史学の役割についてのおずおずとした自信なげな述懐と、和歌森氏、林氏の自信たっぷりの樂觀性とはおよそ対照的である。これは下田氏と和歌森・林氏の個人的資質の差ではなく、下田氏の世代と和歌森・林氏の世代との歴史学をとりまく状況の差である。この半世紀、日本の歴史学は、よい意味でも悪い意味でも、問題意識が拡散し、とらえる対象も膨大な範囲に及び、一見して鳥瞰できないほどの大量の歴史研究状況の渦の中で、自らの方向性を断定的に言うことができなくなってきた。ましてや一人一人の歴史家が自分の歴史研究を「より良き明日のため」とか「人間の認識の進歩」とか位置づけることは誠に思えないことであるように思えてきた。

これは退歩であろうか。もう少し考えてみよう。

二 敗戦と歴史学の課題

第二次世界大戦における日本の敗戦は、日本の歴史学と歴史家のあり方を根本的に変えた。敗戦後の日本の社会的課題とされた近代化、民主化を担うため、それにふさわしい歴史認識を構築することが必要とされ、そのための歴史学の

成果を提出することが求められた。また歴史家の側もそれを自覚的に受け止め、日本社会の課題を自らの歴史学の中に投影しようとした。戦後の歴史学が、日本社会の近代化、民主化の課題に応えようとして悪戦苦闘してきたことを考えれば、当時の歴史家が、半世紀後の後輩たちのように、歴史研究を個人の好き嫌いとか趣味とか言っておられる余地はなく、自らの学問を日本国民の切実な課題認識に基づく学問的営為として位置づけたのは当然のことであった。

戦後のマルクス主義歴史学を愚直に代弁した歴史家大丸義一氏は、戦後歴史学の特質として「民主主義の立場にたつ、民主主義的で、方法的には科学的な歴史学と総括することができよう。……戦前の神がかり的で非科学的な天皇主義的国家主義的な歴史学への徹底的批判から、民主主義的科学的歴史学がめざされたのであった」と述べている。⁵「敗戦直後のこの時期、マルクス主義史学者と非マルクス主義者の学問的共同が民主主義と科学の旗の下に実現していた事実を確認しておく必要がある⁶」との大丸氏の確信に満ちた発言は、戦後歴史学、そしてそれを担った戦後民主主義の幸せな時代を思わせるのだが、それはともあれ、このような「民主主義擁護の旗印を掲げた科学的歴史学」の時代には、歴史学の社会的課題は明瞭に過ぎ、歴史学が何の役に立つかなどという問題設定はそもそも愚問なのであった。

実際、社会的課題意識を赤裸々に告白する大丸氏の熱き思いとは裏腹に、当時の歴史家たちは、上述の和歌森・林氏と同様、歴史学の社会的役割や有用性について必ずしも大きな声を出して何かを言っていたわけではなかった。むしろ、今から見れば意外なほど、醒めた態度をとっていたとも感じられる。

例えば、やはりマルクス主義の立場に立つ著名な古代史家であった太田秀通氏は『史学概論』の中で歴史学の有効性についてこう述べている。

歴史学が研究の叙述または歴史叙述を通じて社会に提供する有効性は、まず心の糧をあたえることである。それは広く人事を知らせ、歴史の動きの大勢を知らせ、人類のたどってきた苦難の道を知らせ、原始社会から今日にまで高度の文明を築きあげてきた人間の偉大さを知らせ、数多くの人間の罪業を知らせ、これによって人間のいわばドストエフスキーの深淵を知らせ、そのことによって人間形成に関与する。それは同時に好奇心を満足させ、教養を高め、他国の歴史を理解させ、過去の理解によって未来への展望を可能にさせる。^⑥

太田氏の立場はマルクス主義というよりも大正教養主義を思わせる。それほど、歴史学が持つ教養としての力量に深い確信を抱いている。「もつともこの有効性は、実家がいうところの『学問をして何の役に立つか』という意味での実用性とは無関係である。そのような実用性は歴史学にはない」と断言するところなど、高踏派太田氏の面目躍如たるものがある。しかも「こうした有効性は、早急に求められてはならず、有効性のみを求めて真理を犠牲にすれば、それは人々を誤らせるのみである。誤認と虚偽とは科学的な歴史学の敵であり、ことに虚偽はその実体をあばいて人々に示すべきである。真理なればこそ役に立つ、というのがことからの本質であり、その逆ではない」という言い回しなどは、歴史学と真理追求との同質性についてのほとんど牧歌的な信頼を示している。^⑦

一方で太田氏は「歴史学の有効性は、階級社会においては分裂し、支配階級は自己の階級的利害に基づいて階級的有効性を測定し、この見地から非科学的な歴史観を育てようとする。これが歴史学が一定の有効性をもっていることの証拠である」とも言う。^⑧この文章は、歴史学を含む人文社会諸科学の階級的性格を認めるはずのマルクス主義の立場からすれば書かれて当然のもののだが、上記の教養主義的叙述の中ではこの部分だけがむしろ浮いた印象すら受けるので

ある。

もう一人、戦後歴史学の中ではどちらかと言うと傍流に属し、その死後にむしろ再評価されるようになった特異な思想的歴史家で、国民歴史教育の分野でも積極的に発言をした西洋中世史家上原専祿氏は、歴史学の社会的職分が社会に對してもつ意義と効用について次のように述べている。

その意義と効用は、何よりも、社会がすでに直観している現実問題について社会を理性的に自覚させ、社会に問題情況についての歴史的認識を与え、かつ自覚と認識を無限に深めていく、という社会的職分自体のうちに存するだろう。……歴史学は、社会の当面している現実問題があくまで個性的なものであること……をきびしく指摘することによつて、政治的、倫理的意志の情性化をいましめ、それに新しい責任感を課するだろう。……歴史学は、人間の理性のあり方における限りない可能性というものについての洞察を提供することによつて、ややもすれば困難にためらう政治的、倫理的意志に暖かい慰撫と激励を送るだろう。⁹⁾

上原氏の場合は、あくまで「学問としての歴史学」が社会的諸問題について歴史的理解を深めるための参考資料を提示すること、それ自体が歴史学の効用ということになる。「社会の当面している現実問題があくまで個性的なものであること」というくだりは、戦前から戦後にかけて日本の歴史哲学界を席卷した西南ドイツ学派の「歴史の一回性」「個性化的認識」を思わせるものがあるが、ここには「学問としての歴史学」に對する深い信頼が見られるとともに、「社会的職分」「政治的、倫理的意思に暖かい慰撫と激励を送る」といった語り口の中に「学問に過ぎない歴史学」の限定

性をもとらえているように見える。マルクス主義歴史学とは異なる視点から、日本の客観的現実を見据えて歴史学の社会的役割を考えていた歴史学者の真剣さが感じられる。

いずれにしても、戦後の一九五〇年代から六〇年代にかけて、碩学たちが歴史学の社会的役割を論じる場合に、その論じ方に濃淡はあれ、そうした役割が「有る」ということ自体は自明の前提であり、社会的役割を声高に論じるよりもむしろ、歴史学の科学としての力量に対する無限の信頼と、真理追究と社会進歩との予定調和観に支えられた余裕ある態度が特徴的であったと言えるのである。

こうした歴史家の感覚は、さきほどの下田淳氏の「我関せず」風の歴史効用論とは明らかに距離がある。どこで変化したのか。

三 「社会史」の登場と教科書問題

私の見るところ、歴史学が「役に立つ」学問なのかどうかを意識的に問題にし始めた、言い換えれば、歴史学の有用性について黙っておられずに何かを言い始めたのは、一九七〇年代後半から八〇年代前半にかけてくらいなのではないかと思う。この時期は、第二次世界大戦後に産み落とされた日本の新しい歴史学がさまざまな方面から疑問を突きつけられた時期であった。それらのうち、今日にまで続く重要なインパクトを与えたものとして、ふたつのことが考えられる。ひとつはいわゆる「社会史」の台頭であり、もうひとつは一九八二年の教科書問題の発生に見られた戦争責任論に

関わる中国、韓国などからの日本歴史学に対する批判である。

まず「社会史」の問題について考えてみよう。

一九七〇～八〇年代、日本の歴史学会はヨーロッパ、とりわけフランスのアナール派の主張する「社会史」の挑戦を受けていた。^⑩ それまでの社会構造的論的、発展段階論的歴史把握に対して、社会史は「変わらない歴史」「心性（マンタリテ）」といった新しい手法と叙述法によって問題提起を試みていた。「社会史」は政治史・事件史偏重の既存歴史学に鋭い批判をあびせたので、国家権力による支配構造の分析と其中的の民衆の反権力運動を重視して歴史像を構築していた戦後歴史学は、「社会史」の声高な批判に対して、どちらかというところと当惑していたというのが実情であろう。

ところでその際、「社会史」は歴史学の有用性といった問題についてことさら何かを語ることはなかった。というよりも、そうした社会的課題との直接的な結びつきを意識的に避ける傾向にあった。それは、戦後歴史学が無言の前提としていた歴史学の社会的責任、社会的課題といった問題について、その息苦しさを直接非難するのではなく、間接的にともかく風穴を開けたいという雰囲気でもあった。

こうした空気を感じさせるこの当時の「概論」ものに、いわゆる戦後歴史学とは一線を引き、日本の歴史学界よりはむしろヨーロッパ史学界の雰囲気と漂わせながら新しい歴史学の可能性を引き出そうと苦闘していた西洋中世史家樺山紘一氏が編纂した『歴史学』がある。この巻頭言で編者樺山氏は、近代歴史学が近代知の体系の中の産物であること、そして近代知の体系そのものが今や疑問にさらされていることを指摘したうえで、とくに近代歴史学が部分史、ジャンル史として成立したことに着目し、こうしたジャンル設定そのものが批判の対象たり得るとして、次のように言う。

歴史家の姿は、富士という全体像をもとめて、山麓を徘徊する写真家に似ているかも知れない。……視座というものは、理論科学からのア・プリオリの論理的要請にもとづいて、自立したり、消滅したりするものではなく、歴史の全体像をさがしもとめるプロセスのなかで、自由に軽快に転換されうるものである。ときには、望遠レンズで、ときには彩色フィルターをかけて、写真がつくられうるはずでもある^①。

少々分かりにくい言い回しかも知れない。樺山氏は近代歴史学が政治史、経済史、法制史、美術史等々といったように自らを分類し、ジャンル分けすることで「部分史」としての精緻化をはかってきたことが学問的成果を収めたことを認め、逆に成果を収めたからこそ「部分史」としてしか歴史を見ることができず、またジャンルの設定自体も固定化され制度化していると指摘するのである。氏は近代歴史学の中で分類されてきたこれまでのジャンル史に対して「全体として」歴史をとらえることの重要性を説く。もちろん全体をとらえることは容易ではないから、とりあえずは「部分」から出発せざるを得ないが、その場合も「部分」を固定した領域に実体化させないことが必要であるとする。富士山という変わらない「全体」を山麓を徘徊しながら自由に撮影する写真家のように、さまざまな富士をさまざまなままに楽しめばよい、というのである。

ただ、さまざまに可変的な視座から「全体」を探ろうとする歴史学の方法に危険があることは樺山氏も認め、それでもこの方法の必要性についてこう述べる。

もちろん、全体についての素朴实在論を放棄し、また視座の自由転換をみとめるならば、歴史家たちがつくり出

す複数の全体像のあいだには、アナーキーが発生することになる。その危険を十分に察知しなければなるまい。しかし、たとえそうであっても、近代歴史学が経験してきたような、固定領域の分割秩序や、存在についての根拠のない素朴で凡庸な実在信仰の、息苦しさよりは、はるかに知的犠牲を軽減しうるのではあるまいか。現代歴史学は、アナーキーにたえる知的強韌さをまずもって、必要としているのである。¹³

樺山氏はここで歴史学のもつ社会的効能や有用性について直接語っているのではない。しかし、氏のこのような立場が歴史学の社会的役割を規定し固定化していくことの対極にあることは容易に見て取れる。氏は歴史学の社会的役割をもとより否定することはないだろう。ただ、その有用性自体も一義的なものにせず、個人の価値判断に土台を起きながら、可能な限り多彩に歴史学を開花させることが、近代知としての近代歴史学の克服のために必要であり、求められているとする。こうした立場は、これまで見てきた戦後歴史学の実直な課題意識とは明らかに異質なものであった。

ところで、「社会史」が台頭しつつあった一方で、この時期は歴史学の社会的役割が以前にも増して重視された時期でもあった。そのもつとも重要な要因は、一九八二年のいわゆる教科書問題であつたろう。この問題は、従来、文部省の教科書検定批判という形で行われていた教科書での近現代叙述の問題、とくに太平洋戦争の描き方が、中国、韓国などからの批判によつて一気に政治の表舞台に登場したものであった。

教科書問題に触発されながら、歴史学が持つ社会的有用性、あるいはむしろ社会的責任を誰よりも雄弁に主張した論者に古代ローマ史家として著名な弓削達氏がいた。いわば弓削氏版「史学概論」とも言える著書『明日への歴史学 歴史学とはどういう学問か』は、歴史学が持っている社会的有用性をこう肯定的に紹介する。

現在が如何なる未来に導くのかの認識は、過去の意味的関連の把握によって初めて可能となる。過去との意味的な関連の把握は、逆に又、歴史的現在の意味的把握をぬきにしては、不可能である。……

そのような社会的営みとしての科学は、知的な生産である。知的生産がその一部をなす生産とは一般的に言って、素材・材料を用いそれに加工して社会的に有用なものを作り出すことである。そこで事柄を決定するものは、社会的有用性の認識である。社会的有用性の観点に立つて素材に加工し、素材とは異なったものを創り出す創造的作業である。……

知的生産としての歴史学の場合、素材とは、過去の人類の生活から現代にまで残っているその生活の痕跡であり、一般に史料と呼ばれるものである。史料そのものは歴史ではない。それに現代における有用性の観点に立つて加工し、製品を作る。それが社会的な営みの中で行われる知的生産としての歴史学である。……それゆえ、歴史認識の成果を決定するのは、何をもつてわれわれは社会的に有用とみるか、ということである。¹³⁾

歴史学は過去の史料という素材を加工して社会的に有用な歴史認識を生み出す、と弓削氏は明言する。歴史学と社会的課題との密接不可分の関係をこれほど明瞭に宣言した歴史家も数少ないであろう。では何をもつて社会的に有用とみるかはどのように判断されるのだろうか。弓削氏はこう言う。

強者と富者の利己主義とその支配による似而非平和を暴き、弱者と貧者の生存と幸福を優先原理とする全く異質の平和構造の可能性を真剣に追求することこそが、今日における、未来の存在を信じうる唯一の選択であるだろう。

現代において、社会的に有用な歴史とは、この選択の目を以てもう一度見直された世界史像のほかはあるまい。¹⁵⁾

弓削氏のこの言い回しは独特のものである。歴史学の社会的有用性を明確に認め、むしろ逆に、社会的有用性から見たあるべき歴史学とは何かをはかろうとしているとすら読める。もしそのようにすると、何を社会的有用性あるものとするかという個人の価値意識が俄然重要になってくる。個人の価値意識は客観的に正当性を主張できるものでないから、結局はこれは価値意識どうしの対立に陥らざるを得ない。弓削氏自身もこれを隠そうとはしない。教科書問題の中で、戦前日本の中国進出を「侵略」から「進出」に改めさせた文部省教科書検定の側の言い分として、史料がないとか史料によればとかいった言い方がしばしばされるが、事柄の本質はそういうところにはない。文部省の教科書検定は「時代遅れの『社会的有用性』の立場からする加工」であり、「両者（文部省と教科書執筆者）の論争は一見、……史料の信憑性をめぐって行われているが、より根本的にはこの『社会的有用性』の認識の対立に由来する厳しい対決がある」と弓削氏は言うのである。¹⁶⁾

弓削氏によれば、文部省と教科書執筆者との対立は両者の社会的有用性をめぐる意識の対立に由来するのであり、史料の読み方の問題ではない。すなわち「社会的有用性の基準の衝突の問題を、史料だけの問題としてすりかえていること、つまり、史料はそう語るのだ、と主張していることも、歴史学を学ぶ者にとって見落とさるべきでない重大な問題である」とする。文部省教科書検定が「史料の存在」や「通説」云々という一見客観的で中立的であるかのような装いをこらしつつ、実は文部省教科書検定官が抱いている何をもって社会に良しとするかという社会的有用性の基準を絶対視して、その観点から教科書執筆者の教科書叙述を裁断している、と弓削氏は喝破する。歴史認識と歴史学の社会的有

用性についてのまことにのつびきならない関係についての指摘である。

以上のように、一九七〇年代後半から八〇年代にかけての時期、一方で「社会史」の隆盛と視座の拡散があり、他方で八二年の教科書問題に端を発して、歴史学が現代史、とくに戦争の歴史について国民の歴史認識構築のためにどのような貢献ができるかが問われていた。歴史学の社会的有用性は、固定的に見るべきではないという潮流と、ますます重要視されていくという潮流とが、たがいに直接には交錯することなく、それぞれ自己を主張している状況があった。

四 歴史学は現実の課題には役立たないか

歴史学の社会的有用性という問題についてのもうひとつの興味深い議論は、「社会史」の評価をめぐる佐々木潤之介氏と遅塚忠躬氏のやりとりである。

やはりマルクス主義的な立場から日本近世史について主導的研究をしていた佐々木潤之介氏は、人間社会の諸々の諸側面について考察を加えるという意味での社会史と、フランスのアナール派に代表される当時一世を風靡しつつあったいわゆる「社会史」とは似て非なるものであるとして、いわゆる「社会史」について次のように批判を加えた。

人と人との結びつきや人々の生きざまを、生産諸関係の総体としての経済的構造やイデオロギー的社会関係を内容とする上部構造よりなる社会についての問題関心をヌキにしたまま描き出そうとするその心根は、前述の「公」

の考え方（「われわれにとつて、政治や思想問題は『私』のことで、友人との交際や遊びが『公』なのだ」と言った大学院生の話を紹介している……注清水）と、見事に一致しているのではないだろうか。……歴史学はその歴史の中から、何のために何をとり出してどのように解明するかということがまず問題になるのであり、碎いて言えば、それが歴史学の方法論だと考えている。¹⁶

それに対して、フランス革命史研究で著名な遅塚忠躬氏が同じく『歴史学研究』誌上で、佐々木氏の「社会史」批判がイデオロギー的な批判になっている点について注意を喚起したうえで、歴史学という学問の性格をめぐって次のような議論を試みた。

このように、対象をその歴史性||時間性||変化の相||現在との異質性においてとらえることが歴史学の本来の性格であるとするれば、先に述べたように、現実との間に一定の距離を置くことこそが、他の社会科学とは異なる歴史学の独自の性格なのであり、従つて、歴史学と現実とのかわり方は、直接的ではなくてあくまで間接的であり、従つてまた、歴史学は、現実の課題の解決に役立つものでもなくそれを目的とするものでもない、と言えるであらう。¹⁷

歴史学は現実の課題の解決に役立つものでなく、それを目的ともしないと遅塚氏は明言する。『歴史学研究』誌上でここまではっきりと歴史学と社会的課題との関係性のなさを指摘する論文が掲載されるのは稀である。このような言い

方は先の樺山氏の問題意識とも重なるであろうが、しかし樺山氏は遅塚氏のような明言の仕方はおそらくはしないであろう。遅塚氏は樺山氏が批判の対象とする戦後歴史学の構築に自身深く関わっており、その限界性に自戒を込めて敏感であろうとする気持ちがこのように黒白決着型の物言いになるのではないかと推測する。歴史学が現実の課題の解決に資することはないとの見方は、歴史学の性格からも言えることだと遅塚氏はさらに続ける。

歴史学のいとなみは、最後まで主観性を免れることができないのである。何故なら、ある観点からする諸事実の選択が主観的であり、次いで、それら諸事実の間の関連（たとえば因果関係）を考えることもまた主観的な想定（解釈）にすぎず、従って、結論として提示される命題もまた主観的な仮説に他ならないからである。……

歴史学が、客観性を獲得することはおろか客観性に次第に近づくこともできないとすれば、そのような歴史学の本来的性格（限界）を自覚した場合、歴史学は現実の課題の解決に役立つとかそれを目的とするとかいうことが果して言えるであろうか。¹⁸

戦後歴史学の伝統の中にありつつ、しかしアナル派「社会史」にも相応の理解を示す遅塚氏は、歴史学と尚古趣味とは個人的価値観に立脚するという点で変わるものではなく、観点の多様性はそのまま容認するべきだとして、身边雑事であろうが天下国家であろうが何を論じても構わないとの立場をとった。そして、現実の課題との関係で、法学や経済学は現状の分析を究極の課題にし、現実の課題に直接応えることを目的としているが、歴史学はその対象が現在とは異質の世界としての過去であり、歴史学と現実との関わりはあくまでも間接的で、従って歴史学は現実の課題の解決に

役立つものではないし、それを目的とするものでもない、としたのである。

今日読み直しても、遅塚氏が自分を含めた戦後歴史学のある種の狭さを克服しようと精一杯の誠実さと率直さで叙述していることが分かる。当時、戦後歴史学が社会の切実な課題を意識し、それに応えることを自らの任務と課していたことを考えれば、遅塚氏が、どのような性格のものであれ、歴史家の主観的判断において大切と考えたテーマを扱うことは学問的でない証拠にはならないという主張は意味があった。「歴史学は現実の課題の解決には役立たない」と遅塚氏が述べるとき、「歴史学に実用性はない」と喝破した太田秀通氏の教養主義（決して悪い意味ではない）と軌を一にするものがある。遅塚氏は歴史学の学問的意義に対する深い信頼のうえに歴史家個々の課題意識の大切さを説き、それらの課題意識が社会の現実的課題と直結しない故に疑問視することの狭隘さを戒めている。そこにはやはり、歴史家個々がどのような課題意識をもって学問と接するかについて、より深い次元での反省があり、歴史学と現実の社会的課題との応答の必要性についての遅塚氏なりの見通しが感じられる。

歴史学の社会的役割、有用性をめぐるこうした先達の議論は現在、どのように生かされているであろうか。

佐々木・遅塚論争から二〇年ほど経ち、今日の問題意識から、平易な言葉で歴史学の意味を語ろうとしたフランス近代史家小田中直樹氏は「存在意義についても、科学性についても、そして社会的な有用性についても、歴史学に対しては疑念が突きつけられています」とし、そのうえで、どのような意味で歴史学の有用性を考えることができるかを、いわゆる「従軍慰安婦」問題を題材に検討している。

氏は、この問題に積極的に関わった歴史家吉見義明、政治学者坂本多加男、社会学者上野千鶴子の三者の議論を比較しながら、吉見の立場を擁護する。その理由は、吉見が歴史家らしく「従軍慰安婦」問題の客観的事実関係を確証する

ことを重視するのに対し、坂本が新自由主義の立場から「従軍慰安婦」問題のような負の過去よりもむしろ肯定的な過去像を提示することによる国民のアイデンティティ共有を重視し、また上野がフェミニズムの立場から客観的事実の確証という狭い枠に囚われずに被害者の告発のもつ圧倒的リアリティを重視するからである。坂本、上野は吉見が示したような事実を客観的に論証する姿勢に欠ける、と小田中氏は指摘する。

歴史像を提示するにせよ、それ以外の営みにせよ、なんらかの方法を用いて歴史家が社会の役に立とうとするのであれば、根拠がある史実にもとづくという「真実性」を経由しなければならない、とぼくは思います。……従軍慰安婦論争に即していえば、上野や坂本は真実性を経由しようとしていませんから、そのかぎりでは歴史学の枠内にはありません。²⁰

言い換えれば、小田中氏にとって、歴史学の有用性の根拠はその事実確定能力にある。

歴史像の正当性を計る際に使える基準といったら、そこで提示される解釈や認識の正しさにおいてほかにはありません。そして、歴史にかかわる解釈や認識の正しさについての知識を提供できる学問領域といったら、歴史学においてほかにはありません。歴史学が提供する基準が絶対的に正しいという保証はありませんが、でも、基準自体をよりよいものにしてゆくことはできるはずで²¹す。

こうして小田中氏は歴史学の役割をこう結論づける。

真実性を經由したうえで社会の役に立つとすること。（坂本や上野のように……注清水）集団的なアイデンティティや記憶に介入しようとするのではなく、個人の日常生活に役立つ知識を提供しようとする事。このような仕事に取り組みるとき、歴史学は社会の役に立つはずだ、そう、ぼくは思います。⁽²⁾

小田中氏は歴史学の有用性を承認しようと努める。ただ、それは歴史学の実証科学としての性格に根拠を持つ。それ以上に歴史学が何かを主張しようとする、氏はその主張自体には十分に意義を認めるものの、それが歴史学固有の存在意義として認められるかどうかというところまで論を詰めていないようだ。太田秀通氏、弓削達氏、遅塚忠躬氏といった日本の戦後歴史学を担った先人たちが積み残した課題は依然難問として現在も残っている。小田中氏の中途でとぎれている歴史学論は日本における歴史学と歴史家の苦悩を表現しているのである。

おわりに

そもそも歴史学が「役に立つ」とはどういう意味だろうか。

西洋近代史家の岡崎勝世氏によると、実用的歴史（historia pragmatike）という言葉を発明したのはローマの歴史

家ポリュビオスであるという。このpragmatikeという言葉は「国家的事件」とも訳せる言葉だそうで、国家的事件と実用性とがなぜ結びつくかというと、「古代の歴史は、そこに示された真理を通じ、市民の政治生活に教訓を与え、同時に未来をも導く、実用的歴史でなければならなかったのです。逆にまた、市民の実用に供するためにも、歴史は政治史でなければならなかったのです」という。²³

岡崎氏の指摘は古代の歴史に限らず、一九世紀から二〇世紀の歴史学にもあてはまりそうである。政治史であることと実用的であることは関係がある。とすれば、役に立つかどうかを問題にする心理の裏には、長い間政治史偏重で、国家の統治に益するものとして歴史を考えていたことに対する批判があるのではないか。

岡崎氏はこうも言う。

ペルシャ戦争の究極の原因とペルシアの敗因がクセルクセスの「野蛮不遜」にあると説明されて、今日、納得する人はいるでしょうか。しかし、少なくともアテネ人は納得していると言えます。²⁴

これなども、第二次世界大戦の原因と敗因についてのわれわれの観念と似ている。われわれはドイツや日本の敗因をアメリカなどの大国の技術的経済的力量に帰するが、同時にヒトラー、ファシズム、軍部独裁が民主主義に勝つはずはないという確信にも支えられている。日本がアメリカに勝てるはずはないという言説は、アメリカの物量に対する賛美であると同時に、日本のように技術的に劣った国がアメリカに楯突いたという日本人の愚かさに対する軽侮の念の裏返しでもある。「正しいものは勝つ」という信念は、再生産されている。だから、日本の戦後歴史学の主題は、日本の何

が「正しくなく、またその不正が何によつてもたらされたものであるかを究明することにあつた。敗戦の原因を技術的なもののみに帰するのであるならば、このような問題意識は生まれていない。

歴史学の社会的有用性について、敗戦直後の意気軒昂な時代を経て一九七〇年代のある時期まで、これを問題視する歴史家はいなかったと思う。むしろ歴史学の社会的課題なり役割なりの強烈な意識に支えられて戦後歴史学は存立していたはずである。しかし一九七〇年代後半くらいから、「社会史」の登場にも触発されて、日本の歴史家のこの問題についての感覚は明らかに変化し始めた。歴史学が社会的に何らかの意味を持つてゐること、それ自体をまったく否定してしまう歴史家はいないだろうが、しかし、戦後歴史学が抱いていた学問と社会的課題との緊密な連携という感覚は、それ自体が戦後歴史学（あるいは近代歴史学）の時代的制約の中にあつたという認識は次第に一般的になつてゐる。

戦後歴史学は平和と民主主義を確立するための日本国民のための歴史認識の構築を目標に展開されてきた。歴史学の目的、役割が単純でなくなつた今日、そのような牧歌的、予定調和的な歴史学と社会的課題との関係はもはや困難になつたことは間違いない。しかし、ならば歴史学の社会的役割、社会的有用性は史料批判、事実確定力のみ限定されるのであろうか。たしかに歴史学の史料解釈学・史料批判学としての役割は比較的反論の余地が少ない領域であらう。小田中直樹氏が歴史学の有用性を認めるときの根拠はまさしくこれであり、逆に言えば、歴史学の有用性がさまざまに異論が差し挟まれる中、少なくともこれだけはというものが、歴史学の史料分析力、事実確定力なのである。しかし歴史学の社会的役割、有用性はそうした技術的な意味での歴史学の学問的有効性に限定されるだらうか。

歴史学はどのような学問と考えるのか、歴史学の社会的役割は何かは、結局、日本の歴史学の成果をどのようなものとみるかという問題に帰着する。学問の多様な発展と、一方で社会からの要請に今後、歴史学がどう応えていくか。歴

史家はこの問題について、今後も考え続けていくことであろう。

- (1) 下田淳『歴史学「外」論 いかにか考え、どう書くか』青木書店、二〇〇五年、一八〇一九頁。
- (2) 宮島肇『歴史とは何か』(和歌森太郎編『歴史』有斐閣、昭和三〇年)、二五〇二六頁。
- (3) 林健太郎『史学概論』有斐閣、昭和二八年、二二八頁。
- (4) 大丸義一『戦後歴史学』の特質をめぐって、『現代を生きる歴史科学』三、青木書店、一九八七年、三頁。
- (5) 同書、四頁。
- (6) 太田秀通『史学概論 人間の科学としての歴史学』学生社、昭和四〇年、二二六頁。
- (7) 同書、二二七頁。
- (8) 同書、二二七頁。
- (9) 上原専祿『歴史学序説』大明堂、昭和三三年五月、八九〇九〇頁。
- (10) いわゆる「社会史」はヨーロッパでもイギリス、フランス、ドイツと国によって色合いが異なり、イギリスは民衆運動史の側面が、ドイツは社会構造史の側面が強いのに対してフランスのアナール派などは社会的紐帯や心性史を問題する傾向が強かった。イギリスやドイツでの「社会史」は日本の歴史学界にとってはむしろ馴染みやすかったのに対し、フランス「社会史」はこれまで日本では扱ってこない領域やテーマを扱っていた。
- (11) 樺山紘一「現代歴史学への道 近代歴史学の批判と継承をとおして」(樺山紘一編『歴史学』日本評論社、一九七七年、一七〇一八頁)
- (12) 同書、一八頁。
- (13) 弓削達「明日への歴史学 歴史学とはどういう学問か」河出書房新社、一九八四年、一一〇一六頁。
- (14) 同書、一八頁。
- (15) 同書、三三頁。
- (16) 佐々木潤之介「社会史」と社会史について、『歴史学研究』一九八三年九月号、三三三頁。
- (17) 遅塚忠躬「社会史」批判をめぐって、『歴史学研究』一九八四年九月号、三三三頁。
- (18) 同書、三三〇三四頁。
- (19) 小田中直樹『歴史学ってなんだ?』PHP新書、二〇〇四年、二〇頁。

- (20) 同書、一二八～一二九頁。
- (21) 同書、一〇四頁。
- (22) 同書、一三〇頁。
- (23) 岡崎勝世『世界史とヨーロッパ
ヘロドトスからウオーラーステインまで』（講談社現代新書、二〇〇三年一〇月）、四八頁。
- (24) 同書、五一頁。

（本学法学部教授）